
【三題噺】 独りじゃない

うるる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【三題噺】独りじゃない

【Nコード】

N0307W

【作者名】

うるる

【あらすじ】

「文学少女」シリーズより三題噺

お題は【お雑煮】 【ご当地】 【雨霞、あめあられ】

【雪うさぎ】 【蜘蛛の巣】 【年女または年男】

廃墟に紛れ込んだ独りの少女のお話

お題【お雑煮】 【ご当地】 【雨霰、あめあられ】
【雪うさぎ】 【蜘蛛の巣】 【年女または年男】

廃墟にそれはそれは冷たい雨霰が降り続けるの。

それは津々と私の身体に染み込んでいく。そして私の心の寂しさに浸透していくの。

ここには今、私しかない。

忘れかけていた孤独が蘇る。

一人が寂しい。一人が怖い。

ああ、知らなかった。一人がこんなに苦しいものだったなんて。

ううん、忘れてただけ。一人なんて昔にあったじゃないか。

私は知っていた。雨がこんなにも痛いものだったなんて。

知っていた。

魔法が当たっても、相手は平気な顔をしてそこに立っていた。一体どういう事なんだろう。効いていないのだろうか。

そういえば、パブの噂話で聞いた事がある。この森には遥か昔に滅びた都があるのだと。そしてそこをご当地にして暮らしている種族なのだ。彼らはバクナムス族といい、小柄でガスマスクを着けた頭が印象的。今私の目の前に立っているのはまさしくその姿をしている。初めて見た。小柄で角があり、ガスマスクという装備が何とも威圧的である。

そして彼か彼女か分からないバクナムス族は私を見た瞬間に襲い掛かってきた。軽くこちらに跳んできて、殴りかかってきた。しかし、それは避けられない速度じゃない。私は素早く避けて、魔法を繰り出す。

「いでよ、炎の精霊！ファイアウィップ！」

跳んでいるバクナムス族は隙だらけ。炎の精霊が勢い良く、確実に当たった。なのに、バクナムス族は何事も無かったかの様に再び私に向かってきた。

もしかして、当たってなかったのかな：

私はその後も何度も確認する様に、避けては様々な魔法を繰り出す。しかし、その度にバグナムス族は繰り返し、私に向かって襲ってくる。真正面から襲う事だけをインプットされた機械の様に。

精霊たちによれば当たっていることは確かなのだが、まるでダメージが無いと言っている。実体はあるのに、ダメージを与えられない。強すぎるのか：

どうやら私はとんでもない所に迷い込んだらしい。

するとバクナムス族の動きが突然止まった。一体何だ。私もつられて動きを止めた。

止まってから感じるのは雨霰による痛み。ここの雨水は酸が強くて触るとぬめつとする。そして霰も降ってくるので、当たった時は痛い。これも廃棄物に塗れたご当地ならではの特徴なのだろうか。雨霰なので避ける事もできないし、こうやって耐え凌ぐしかないだろう。

そして早くこのバクナムス族の弱点を探さなくては…と思った時だった。

「グオオ…！！」

低く、けたたましい声がバクナムス族を中心に響き渡り始めた。彼が叫んでいるのだらう。そこで再び私は構えた、モンスターの雄たけびというのは基本的に援軍を呼ぶ可能性が高い。

しかし、このバクナムス族、一回だけでなく何度も叫んでいる。そして何度も叫ぶ内に私はある事に気付き始めた。

「…もしかして、泣いているの？」

何となくだ。しかし、私は精霊と同じくモンスターの感情もたまに

分かったりする時があった。あながち間違いではないと思いたい。すると私の声が聞きとれたのか、ただ大声を上げて叫んでいたバクナムス族が急に小さく、唸るような声になったのだ。どうやら何か反応を示したらしい。

「おお…がぁ…いい…」

「えっ？」

何だ、このバクナムス族。もしかして私たちと共通の言語が喋れるの？そこで何度か聞き直してみると、段々とバクナムス族の喋っている事が分かってきた。

「お雑煮がぁ…食べたいい…」

お雑煮。聞いた事がある。人間族が年の初めに食べる餅を使った料理だと。残念ながら私の種族ヴィエラにはその伝統がないから、よく分からないんだけど…でもクランで食べた事はある。温かくて、美味しかった。

「美味しいよね！これを食べると『あぁ、一年が今年も始まったな』って気分になるんだ。」

そんなことをウチのクランのリーダーが言ってたっけ。懐かしいなあ…

「あなたも、お雑煮が食べたいの？」

私も食べたい。だからつい“あなたも”と言ってしまった。この孤独が寂しい。誰かがいて欲しい。クランの誰かが…

「あぁ…うう…」

とバクナムス族が頷く。そして続けて何かを言いたげな素振りをしたので、私はゆっくり話を聞く事にした。

「お…お正月…帰りたい…エリー…エリー…」

お正月に帰りたい…エリーの元へ？

「もしかして…あなた元々は人間族だったんじゃないの？」

「あぁ…うう…」

そうなのか。このバクナムス族というのは元々人間族の一人だったのか。そう考えるとこのバクナムス族への敵対心は徐々に薄れてい

く。薄れていつてる。そしてもう一つの噂話を思い出した。

この地はバクナムス族の住処である故に一旦迷い込むと抜け出せなくなる場所であると。そして抜け出せなくなったものはバクナムス族の餌食になるのだと。“餌食”とはこういう事なのか。抜け出せなくなった者はバクナムス族になってしまうということだったのか。何とも残酷な結末なのだろうか：

このバクナムス族は故郷に帰り、エリーという女性に会い、お雑煮を食べる、そんな何気ない幸せを噛み締めるはずだったのに。はずだったのに。

私は唇を噛み締めた。どうにかして：どうにかしてこの人を人間に戻す事は出来ないのだろうか。

「いいんだ：」

「えっ!？」

「もう：いい。夢、希望：もういい。私：もう死んでる。後は来るもの：拒むだけ。」

そして再び雄たけびをあげ始めた。低く唸るような雄たけび。もうその声に悲しみは無かった。次に雄たけびをあげることはあるのだろうか：いや、もう無いのかもしれない。悲しい。凄く悲しい。思わず涙が一つ零れ落ちた。

雨霰に混じる一粒の綺麗な涙が廃墟にゆっくりゆっくり落ちていった。

あなたにも帰るべき故郷があった。あなたにも待っている人がいた。あなたは一人じゃなかった。なのに、今は一人。冷たくて、痛い雨霰に晒されてあなたはバクナムス族として生きている。

私はそれ以上涙を流さなかった。だって：私だって帰るべき場所があるから。

一人は、もう、嫌だ。

「きつとあなたと同じような気持ちよ。愛するものの為に、私は勝たなくてはいけないの。」
だから――

再び構えの姿勢に入った。先程まで敵対心が薄れていたのに、再び戦わなくてはいけないことに心の痛みを感じる。身体を蝕む酸の雨と心を蝕むバクナムスの思いに私は何かいっばいいいっばいだった様な気がした。話を聞かなければ情が湧く事は無かったかもしれない。でも聞かなかったら。聞かなかったら私は何か大事なものを忘れたままだったのかもしれない。

先程、精霊魔法は色々を使い果たしたので、今度は肉弾戦で対抗することにした。レイピアを構え、相手のバクナムス族を一突きする。刺さった瞬間、バクナムスは特に反応を示さない。ダメージは微量なのか。

それに対してのカウンターの一撃が辛い。何か鈍器のようなもので殴られるのだが、これが痛い。一応私自身回復魔法を持っているので、回復は出来るが、果たしてこのやりあいがいままで続くのだろうか全く分からなかった。終端が見えなかった。

回復。攻撃。ダメージ。攻撃。ダメージ。回復。攻撃。攻撃。ダメージ。ダメージ。

かいふくこうげきだめーじだめー、じこうげきかいふくかいふくこうげきだめ、ー、じ。

段々意識の感覚がおかしくなっていくのが分かった。自分一人でここまで攻撃し、攻撃され、回復するなんて繰り返しをやったことがなかったからだ。魔法の世界の回復なんて、完全に回復するものではない。内部ダメージというのは残ってしまうのだ。例えば鈍器に殴られた部分の回復は出来ても、その中の筋肉の硬直などは治せない。

身体は元気なのだが、中身がもうフラフラである。

そして何回目だろうか。何十回目だろうか。いや、何百回、何千回もやった、そんな気がする。相手のバクナムス族の動きが止まったのだ。そのままゆっくりと倒れて、白い光を放ちながら消えていった。

あなたも一緒にクランのみんなと一緒にお雑煮をご馳走してあげたかったわ…と私は精霊たちと一緒に冥福を祈った。

…!?

クラリと身体が傾いた。どうやら私の体力もここまでみたいだった。この廃墟を無事に抜けられるかどうか分からないけど、今は休まないとどうしようもない。この廃墟に他のバクナムス族が出ないことを祈りながら、やがて私の意識は遠のいていった。

廃墟から早く抜け出したいという想いからか。私はひどく楽しい夢を見た。クランの仲間たちと楽しくパブで戯れる光景。楽しい。楽しいんだ。私は一人じゃないって感じるんだ。私はここにいるんだ。私の居場所がここにあるんだと――

「やあ。目が覚めたかい？」

「!？」

警戒。敵意。死相。本能。

目が覚めた途端に本能的に“その男”から離れようと思ったのだが、既に腕は捕まれ時既に遅し。いや、そもそも私に咄嗟に離れられる体力があつたかどうかを問われると微妙なところだったが。

腕を捕まれてる時点でもう終わったと私は思った。抵抗する力も残っていない。

無性に寂しさが押し寄せてきた。いや、ここで死ぬのは非常に心残りだからである。

私もお雑煮…食べたかったなあ…

「おいおい、何悲しそうに泣いてんだ？俺は敵じゃないぞ。」

「えっ？」

「こんな森の奥で女の子が倒れてるから、どうしたんだと思って来たんだけど…君、森から出られるのかい？」

出られない。とりあえず私はこの男が敵じゃないと思うことにして、これまでの経緯を話した。森に迷ったこと、バクナムス族と戦闘していたこと、そして倒して自分は休んでいたこと。バクナムス族が

元々人間だった、などの話は怪しまれるといけななので勿論端折ったが。

「なるほど…では後は森から出ればいいだけの話ってことか。」

そう簡単に言うが、果たしてこの男に策はあるのだろうか。いや、でも私には何も出来ない。だからもうこの男に賭けてみるしかないのだ。…正直不安だらけであつたが。

「任せな！こう見えても俺は年男だからな！」

年男…はぁ。と私はまた困惑するだけだった。ついてこい、と言うので年男の後をついていくことにした。そこで立ち上がった瞬間、自分の身体がミシミシと音を立てたのが分かった。こんな所で自分の身体が完全に回復するはずもなかった。そんなの分かつてる。

雨霰もさつきからずっと降り続けている。湿気が高いのもあるのか、少し歩くだけで喘ぎ、汗が出る。気持ち悪い。吐き気も催している。でも今動かなくては、本当にこれで終わりのように感じられる。

もうチャンスはないんだと感じた。

だから私は歩き続けた。

さつきからこの年男の後をついていつてるのだが、この男は何を基準にして歩いているのだろうか。少し広いところに出る度にその辺りを一回ウロウロして、方向を決める。しかし私が見る限り向かう方向に何かがあるとは思えない。どこを向いても同じような廃墟と森しかない。なのに、何故そんなに簡単に方向を決められるのだろうか。

すると突然バクナムス族が現れた。これだけウロウロしていれば現れるのも無理はない。しかし、自分の体力は当の昔に尽き果てていた。もう戦える身体ではない。

「下がってな。俺が片付ける。」

と男はバクナムスの正面に立って、戦闘体勢に入った。

「この地ではエンゲージルがないから楽だよな。まっ、こんな地にジャッジなんて来ることもないだろうが。」

そうぶつくさ言いながら男は自らの手から何かを形成し始めた。白い何かを両手で固め、みるみる内に出来上がったのは――

「…雪うさぎ。」

「ご名答。」

何とも可愛らしい雪うさぎだった。それがあつという間に何十体も形成されていき、彼の目の前に並べられた。

「じゃあ、いくよ。」

彼はまるで踊っているかのような素振りです手を巧みに動かし始めた。すると雪うさぎたちは宙を舞い、彼の手に合わせて躍り始めた。踊る雪うさぎたちは非常に可愛らしく、そこにバクナムス族がいることや、森の中にいることさえも忘れそうな、そんな綺麗な光景だった。

しかし、彼の手はくねくねした動きから咄嗟に勢いよく投げる動作へと変わった。すると宙を待っていた雪うさぎたちが本当に投げたような勢いでバクナムス族へと当たっていった。しかも当たった瞬間に爆発といったら、先程の可愛らしい雪うさぎはどこへやらと言った感じである。

更に彼の攻撃は続いた。間髪与えず雪うさぎをバクナムス族にぶつけていき、爆発させていった。そこで一つの記憶が脳裏に走った。先ほどのバクナムス族。元々は人間だった。ここに迷い込み、抜け出せなくなり、そしてバクナムス族へと変わっていった。もしかして今攻撃されているバクナムス族も元々は人間だったのではないのだろうか…

確かに「やめて」と言いたい。でも言ったところでどうなる。いや、せめて「攻撃しないで逃げましょう」と言うことは出来る。しかし何故？という疑問が返ってくるだろう。そうなるとその後でちゃんと説明した方が良さそうだと思った。そして攻撃が止む事のないこの戦闘は悔しいが見送る事にした。

それにしても凄い。こんな攻撃を今まで見たことがなかったので、啞然とするばかりである。いくら相手がバクナムス族とはいえ、こ

のぐらい攻撃を食らうと：

そう思い、私は爆煙の立ち籠る空間を凝視した。やはりバクナムス族が完全に倒れ、先程の様に消えていった。男も消えたのを確認して一息吐く。

もう故郷に帰ることの出来ないバクナムス族たち。帰るべき所へ帰れなくなったバクナムス族たち。彼らにはこうして消えていった方が幸せなのだろうか。苦しみをこの故郷にずっと残しておくようなもののだろうか、バクナムス族にいるということは。

「ふう：」

と言いながら男はどこからか硝子の瓶に入った液体をごくごく飲んでいた。

「：エーテル。」

「ああ。魔力の消費が大きいもんでね。君も先程バクナムス族と戦ったから、その強さは知っているだろう。だから最初から手を抜くわけにはいかないのさ。」

飲むかい？と男がエーテルを差し出して来たので、私は受け取り、残りのエーテルを飲み干してしまった。少し身体が軽くなったような気がした。やはり魔力も大事なんだとしみじみ感じた。

「氷属性が弱点なんですか？」

「ああ。そうだよ。バクナムス族ってこんな湿気った空間にいるもんだから冷たさを知らないってのもあるのかな。とりあえず氷属性で攻撃しているよ。」

そうだったのか：どおりで自分の攻撃が通用しなかったんだと思った。いや、今の戦闘でこの男が私より遥かに強く、戦歴があるということも言えた。いざ敵に回してしまった瞬間、私はおしまいである。

そう思い、私は彼を警戒するような目で見てしまったのか。彼はおいおい：と言いながら微笑した。

「：まあいきなり見ず知らずの人を助けるお前は何者だって聞きたくなるよな。」

そう言いながら、身なりを少し正しくするような素振りをしてから話し始めた。

「俺はね。この廃墟に迷い混んだ人を助ける仕事をしている人だよ。」

「えっ：そうなんですか？」

驚いた。そんな専門の人がいたなんて初めて聞いた。

「そう。本来このエリアは立ち入り禁止区域に指定されて、人々の侵入を禁止している場所である。そもそも歴史から話せばこの廃墟は歴史的には重要な場所であることに間違いはないのだが、あまりにもその廃墟が迷宮化していて、更にバクナムス族が彷徨^{うろつ}いてしまっているお陰で、この廃墟で行方不明になっている人が続出しているんだ。」

そこで私は思い出した。さっきのバクナムス族を。廃墟から抜け出せなくなり、永遠に呪われ続けていた彼を。

「行方不明者の増加に伴い、バクナムス族も増加している。これには何か関係があると見て、自治体による調査は行われているが、何せ一步入ったら出られない森でね：捜査は難航しているよ。」

「そんな中であなたは、ここにいます：」

何故ここにいますか、と訊こうと思ったが男はその質問をされることを分かっていたようだ。

「そうだよ。俺はある能力を持っているんだ。」

そう言い、男は手先から白い糸を出した。それはまるで蜘蛛の糸のような。

「そう、この蜘蛛の糸を使っているのさ。」

「でも、私には蜘蛛の糸が見えなかった。」

「そりゃそうさ。俺にしか見えないように魔力で細工していたからね。この蜘蛛の糸を別れ道を通った場所に蜘蛛の巣を作り貼っておく。そうすることによって一度通った道が何処か分かる。あとは蜘蛛の巣から垂らした糸でルートも少しばかりだが把握することも出来るんでね。」

さつきから広いところでうろろしていたのは、蜘蛛の巣を探すためだったのか…と理解した。

「案外地道のように感じられるが、これで一応は成功しているから大丈夫だ。」

またこれで男がやむを得なくエーテルを飲む理由も分かった。彼の魔力は常に垂れ流されているからだ。ここからやはり相当の魔力の使い手と考えることが出来た。

「雪うさぎの魔法に蜘蛛の巣…それ程の魔力を使えるあなたは一体何者なの…？」

「ただの水先案内人さ。」

そう言いながら、男はまた蜘蛛の巣のない方へと目指して歩き始めた。喋る気はないのであろう。私もこれ以上彼を問い詰めるつもりはなかった。もしよければ弟子入りも考えたが、そんなのは有り得ないだろう。

ここで私は忘れていたことを思い出した。

「あの、お願いがあるんです。バクナムス族を…殺さないで下さい。」

「

ん？何だいきなり？」

「バクナムス族を殺さないで下さい。お願いします。」

「それは何故だ？」

ここで私は先程隠していた内容を話し始めた。バクナムス族が元々は人間族であったこと。私達と同じ言語を喋り、故郷に愛するものもいたこと。ここに迷い込み、バクナムス族と化してしまったことを。

「…やはりそうか。確かにその説が俺達の中でも強かった。人間族が消え、バクナムス族が増えるというのは感覚的にその考え方が出てくるからな。しかしその証拠となるものが見付からなかったから、一概にそれが正しいと言い切ることが出来なかったんだ。…今回の目撃情報、是非とも参考にさせてもらおうと共に、今後のバクナムス族の討伐を抑えるのでしょうか。」

「いや、今回だけ…この森を抜ける時だけでいいです。」

「それまた何故？」

「きつとバクナムス族は“帰れない魂”としてこの廃墟を彷徨っています。だから帰れない魂を倒すことで帰してあげるのは当然のことです。でも…でも私には魂の叫びが聞こえてしまう。だから見ているのが…辛い。」

ああ…なるほど。と男は頷いた。

「君は精霊使いか何かか。」

「そうです。」

「精霊使いになるとやはりその辺りに敏感に反応してしまうんだな…俺にはそんな叫びは全然聞こえないから分からなかった。では先ほどはすまなかったな。」

「いや、いいんです。」

これで、いいんだ。本当はこれで、いいんだ。と私は思った。殺さないでくれとか、ただの私のわがままである。でもバクナムスの悲鳴を聞くのは今は辛いというのはどうしようもないのである。

それから何度かバクナムスに遭遇する事はあったが彼は先ほどの雪うさぎを巧みに活用し、バクナムス族から逃れる事に成功した。攻撃も綺麗だったが、逃げ方も綺麗である。

最早私は無意識で歩き続けていた。雨霞の痛みも、脚の痛みも、心の痛みも感じているけど感じていない。とにかく今はこの場所から早く抜け出したいという一心の思いだった。

早く、仲間に、会いたい。そんな寂しさだけが募っていく。昔は独りでも全然良かったのに。昔は独りの方が楽しかったのに、どうして今は誰かを求めるのだろうか。

ああ…それが愛なのだろうか。と私はまた無意識に思った。孤独から私は愛を貰ったんだ。

また、お雑煮が食べたいんだ、リーダー。愛する者の為に帰る…うん、そうだけど。私は愛してくれる人たちの為に帰りたいんだ。

そう思ったからだろうか。目の前に一筋の光の線が見えてきた。廃墟には無かった、何か明るく眩い一線。男も確信したようにそちらへとどンドン歩いていく。私も徐々に歩く速度が速まっていく。もう絶望とかどうでもよかった。抜けた先が廃墟だったら、それはそれでいい。でも一時の期待ぐらいあったっていいじゃないか。そう思い、私は最後の力を振り絞って駆け出した。

――！！

青空。雲一つとしない青空。雨なんて降ってない。淡々と茂る平野。乾いた風が頬を撫でる。

私は思いつきり叫ぶ。飛び回る。体力も無かったはずなのに、立派に叫ぶだけの体力はあったようだ。

心地よかった。ようやく廃墟から抜け出せたのだ。

「よかった。やはり今年はついてるな。予定より早く抜け出す事が出来た。」

そう年男は頷きながら、廃墟から出てきた。

「本当に…ありがとうございます！なんてお礼を申し上げたらいいのか…」

「いやいや、俺も君から大切な情報を貰う事が出来たんだ。お礼を言うよ。」

それから…と男は右手で真っ直ぐに指差した。その指差した先には――仲間。仲間がいた。

また私は駆け出した。仲間の所へ。そして思いつき仲間ダイブした。

安心感。温もり。私は思わず涙が溢れてしまい、声を張り上げて泣いた。

その時にリーダーが背中をさすって

「おかえり」

と言った、あの温かい言葉を、私はずっと忘れない。

そう、私は独りじゃない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0307w/>

【三題噺】独りじゃない

2011年10月4日22時17分発行